

幼児の非認知能力を育てる 保育者を、どう育成する？

子どもたちの非認知能力を十分に育てられているかどうかは、
園によって大きく異なるのが実情のようです。

園全体の保育の質を高めるためには、保育者の資質・能力を高めることが必要になります。
保育者不足も問題とされる状況下で、どのように保育者の資質向上を図ればよいかを考えました。

インタビュー

保育記録と園内研修を活用して 園全体で非認知能力を育む

非認知能力を育むためには、子ども一人ひとりの興味や意欲を見取り、適切な環境を提供することが欠かせません。そうした質の高い保育を実践するために、保育者の資質・能力をどう高めていくことが望まれるのでしょうか。聖心女子大学の河邊貴子先生が具体的な方法を提示します。

非認知能力の観点から 各園で保育実践の見直しを

認知能力とは、数量化できるいわゆる学力のことで、非認知能力とはそれ以外のもの、「社会情緒的能力」を指します。安定して自分を発揮する力や、がんばる力、他者との関係を築く力です。

日本の幼児教育は伝統的に心情・意欲・態度を育てることを目指してきましたから、「どうして今さら非認知能力が注目されるのか」と感じる保育者もいるでしょう。非認知能力に関わるOECD（経済協力開発機構）調査のベースにある研究は、認知能力に加えて非認知能力が高いと、社会的・経済的に成功しやすいと指摘しています。そのことも、日本の保育者は経験的に理解し、「後伸び」する力などと言いつつ

した。

ですから、日本の保育者にとって非認知能力はなじみのある概念と言えますが、これまで十分に伸ばせていたかを注意深く振り返る必要はあるでしょう。

特に昨今、読み書きや英会話など認知能力の育成を幼児教育に求める保護者が増えています。将来的な不安要素が多く、社会全体に閉塞感が強まり、「できるだけ早く手を打ちたい」という保護者の心理が働いているからでしょう。

そんな風潮を受け、認知能力の育成を売りにする園が増えていると感じます。また、保育所が認定こども園に移行し、「『教育』を充実させなくては」という思いから誤った知的教育に力を入れるケースも見受けま

こうした現状を考えると、非認知



聖心女子大学文学部教授

河邊貴子

かわべ・たかこ

◎聖心女子大学文学部教授。東京都公立幼稚園で12年間教諭として幼児教育に携った経験をもつ。2008年改訂の幼稚園教育要領解説作成協力者、中央教育審議会専門委員（初等中等教育分科会）などを歴任。著書に『子どもごころ—幼児が生きている豊かな時間』（春秋社）など。

図1 ラーニングストーリー

ニュージーランドの保育者が一人ひとりの子どもの
ラーニングストーリーを記述する際に盛り込む5つの視点

- 関心をもつ
- 熱中する
- 困難なことややったことがないことに立ち向かう
- 他者とコミュニケーションを図る
- 自ら責任を担う

能力をますます重視する世界の流れに対し、日本は少し逆行しているように見えます。幼児期は、認知能力と非認知能力は絡み合って伸びますから、認知能力だけに重点を置いても効果が高まりづらいということに十分な注意が必要です。今一度、生活や遊びの中で非認知能力を育てることの大切さを強く意識して、各園が保育の実践を見直すことには大きな意味があるでしょう。

子どもの育ちを理論的に
説明する力が求められるように

いま非認知能力に注目したい別の理由として、昨今の課題である保育者不足の状況があります。目に見えない力や態度からなる非認知能力の育成には、ある程度の経験に基づいた子ども理解や環境構成の力が欠かせません。しかし、保育者の平均勤続年数は短く、残念ながら、ようやく力がついてきた頃に退職する方が多いのが実情です。そのため、園は保育者の数をそろえることに精一杯で、経験の浅い保育者でも対応できるマニュアル的な保育になりがちです。「教育」は外部講師に任せ、保育者は安全管理に徹する園も見られます。

しかし、非認知能力はマニュアル的な保育ではあまり伸びません。子ども一人ひとりの興味や意欲を丁寧に見取り、それに合わせた環境を構成する必要があるからです。そのため、日頃の実践や研修などを通して保育者の資質・能力を高めていくことが欠かせません。

先ほど、日本は認知能力を重視する流れにやや傾いていると話しましたが、もちろん生活や遊びの中で両面を育てようとしている園も多くあります。これまで、そうした園では保護者に対して子どもの育つ力を説明するのを難しく感じたことがあるかもしれません。非認知能力の観点から子どもの育ちを捉え直すことで、「楽しんでいた」「目が輝いていた」といった情緒的な説明に加え、理論的な説明が可能になります。

一例ですが、非認知能力を重視するニュージーランドでは、保育者は生活や遊びを通して5つの視点から、一人ひとりのラーニングストーリーを記録することが義務づけられています(図1参照)。それを通して保護者と子どもの育ちを共有しています。

今後は日本の保育者も、非認知能力を説明する言葉をもつことが求め

られるようになるでしょう。これは、園としての「説明責任」とも言えるでしょう。子どもの育ちを明確な言葉で説明できるようになると、これまで以上に自信をもって自分たちの保育に打ち込めることにもつながるはずです。

子どもが安心して過ごせる環境が
非認知能力を育成する土台

続いて、子どもの非認知能力の育成に求められる保育者の資質・能力を説明し、保育者をどう育てるかという話に移ります。

まず非認知能力が伸びやすい環境として、子どもが落ち着いて過ごせて自由に自分を表現できることが前提となります。そうした環境下でこそ、子どもの意欲や主体性は引き出されるからです。その意味では、子どもが自分らしく振る舞うことを許容する「安心感」が大事です。

逆に、常に正確さやスピードを求められ、保育者の評価に合わせて自分をつくることに慣れた子どもに対し、「あなたらしさを出して」と求めても難しいでしょう。非認知能力の育成には、まずこうした原則を保育者が理解することが欠かせません。

子どもが安心して過ごせる環境で自分らしくあるとともに、一人ひとりが集団の中で輝くように支えることも大切です。非認知能力の育成には、他者と関わって物事を進めていく体験が不可欠だからです。こうした集団づくりは容易なことではありません。だからこそ、保育のプロフェッショナルとしての理解力や技術が求められます。

日々の保育記録を通した 自己研さんで視点をみかく

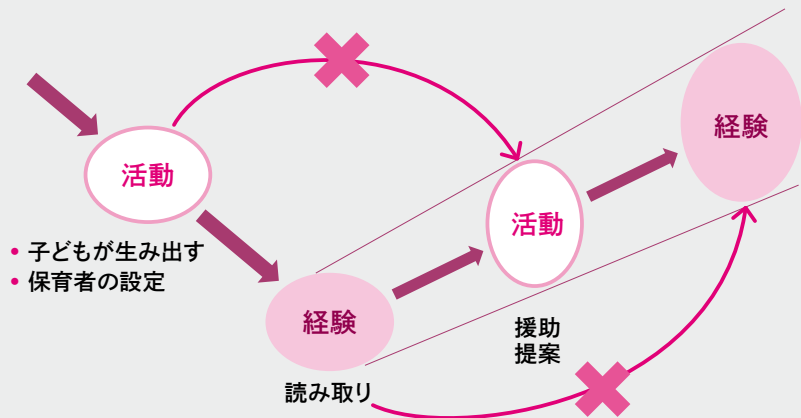
保育者の資質・能力の育成に欠かせないのが、保育記録を通した自己研さんや園内研修による組織的学習です。まず保育記録について説明しましょう。

保育記録は、ただ漫然と書くだけでは、いつまでも子ども理解の力は高まりません。「個」や「集団」を意識して複眼的な視点を育てましょう。

「個」を捉えるためには一人ひとりに寄り添い、どんな気持ちで生活や遊びに取り組んでいるのかを理解していきます。その際、①子どもが経験している内容（遊びの内容や子どもの関心、思い、育ち）、②今後の発達に必要な経験やねらい、③環境構成や援助の具体的な方法、という3つの視点をもつといいでしょう。

例えば、「砂場遊びを楽しんでいた」という記録だけでは不十分です。子どもにとっては、「楽しかった」「おもしろかった」という充実感が全てです。保育者はそこから意味を読み取らなくてはなりません。そうすることで、「明日は少し環境を変えよ

図2 活動の経験を読み取り、次の活動につなげる



〈活動を重ねるだけの保育〉単発の体験で終わり、経験が積み重なりません。

〈適切な環境が構成されない保育〉環境を通した教育になりにくくなります。

〈活動の経験を読み取って次の活動につなげる保育〉活動の経験が積み重ねられ、非認知能力が伸びやすくなります。

う」といった発想が生まれます。

この場面では、「砂場遊びでは楽しそうだったが、もっと固いお団子をつくりたそうにしていた子どももいた」などといった内面を読み取ったとすると、次は適度に砂を湿らせたり、ちょうど良い大きさのカップを置いたり、次の一手が見えてきます。

「集団」の視点では、友だちの動きを見たり、言葉を聞いたりして、自分の中にさまざまな情報を取り入れているかに注意して観察してください。集団の視点をもつと、まった

く関連がなさそうな遊びをするグループの子どもどうしが意外とお互いを見ていることに気づきます。

例えば、おままごとのお母さん役の子どもが、アイスクリームをつくるグループのところに買い物に行くような関わりを通し、遊びと遊びに関係性が生まれます。保育者がこうした関係性を見逃さずにつなげていくことで、より多くの子どもが主体的に活動して、一人ひとりが輝く遊びへと発展していきます。

経験の意味を読み取り 活動をつなぐ視点を大切に

個や集団の視点から子どもを深く見取り、経験の意味を理解できると、次にどのような活動につなげるかが自然と見えてくるでしょう。そうした視点がないと、単発的な活動になりやすくなります。単発の活動は、子どもにとっては「与えられた」活動であり、経験が積み重ねられず、非認知能力も伸びにくくなります。



一才で経験の意味を読みとったとしても、次の経験にむかって適切で具体的な活動が提案されなければ子どもの経験は積み重なりません（図2参照）。

例えば、行事の前に「このクラスは、〇〇を発表します。みんなで練習しましょう」と、唐突に未経験のテーマを発表したら、子どもがなかなか興味をもたなくても無理はありません。そうではなく、それまでの興味や関心をもとに内容を決めると意欲的に取り組み、非認知能力も伸びやすくなるでしょう。

ある園では、お芋掘りの前に一人ひとりの内的な動機を高めるために、お芋がテーマの絵本を読んだり歌を歌ったりしました。そしてお芋掘りのあとは、絵を描いたり、みんなで協力して大きなお芋を製作したりし、子ども会の発表では「おおきなおおきなおいも」の劇を披露しました。活動につながりがもてるようにすることで、子どもたちの思い入れはどんどん強くなっていきました。

このように子どもの興味を出発点とした活動を「形成的プロジェクト」と言います。一般的なプロジェクト学習は、「今年に〇〇をテーマにし

よう」と先に決めることが多いですが、このやり方は幼児期にはなじみません。クラスによって、また年度によって、子どもの興味は大きく異なるからです。「このテーマなら、みんなが意欲的に参加しそうだ」というテーマを保育者が日常の中から見つけることから始めてください。特に園行事は単発的になりやすいため、ぜひ日常の活動と結びつける意識をもっていただきたいと思います。

若手から園長先生までが 同じ目線で語り合う園内研修を

保育記録を通して個や集団を見る目を養うことと並行し、園全体の研修にも取り組みましょう。

園として子どもの非認知能力をどう高めていくかというテーマの研修では、さまざまな立場の保育者の視点から子どもを捉え、今後の園内環境や援助の方法を検討していきます。保育の場面の写真などをもとに語り合う形式にすると意見が出やすいでしょう。

研修では、ある程度、テーマの焦点を絞ると話し合いが深まりやすくなります。その際は、「瞬間を見る

⇔長く見る」「個別に見る⇔全体を見る」の4つの視点を意識すると良いでしょう（図3）。これらはどれも一番大事ということではなく、全ての視点が等しく重要です。子どもにはニコニコとした笑顔を向けながら、頭の中では4つの視点から得られた複雑な情報を適確に処理するのが、専門性の高い保育者です。

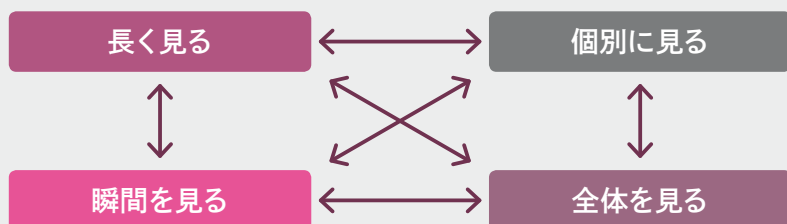
研修ではいっぺんに4つの視点を話し合うのは難しいため、実態に合わせて、ひとつかふたつを選ぶと良いと思います。例えば、「瞬間を見る」の場合は、ある場面の写真を見ながら、「子どもがどんな気持ちで遊んでいるか」などを話し合います。

一方、「長く見る」の研修では、育ちの過程がわかるように一定の期間を置いて撮影した写真や事例などをもとに意見を交わすといいでしょう。また対象児を抽出して「個別に見る」、ひとりの子どもとクラスとの関係性を追うなどして「全体を見る」視点を養っていきます。

非認知能力に関する研修では、保育のテクニックよりも、「どのような子どもを育てるか」といった重要な理念に関わる話し合いがベースになります。ですから、若手からベテランの保育者はもちろん、園長先生なども参加して同じ目線で語り合い、園としての理念や方向性を共有するとい良いでしょう。

定期的に研修を実施することによって、保育者どうしが向上心をもって語り合う風土が生まれやすくなります。そうすると、日々の実践を通して保育者が互いに考え合い、研修がますます活性化するという好循環が生まれるに違いありません。

図3 研修に取り入れたい4つの視点



集団（広く）と個（深く）の両方へのまなざしをもつとともに、時間の意識と空間の意識を両立させることが大切です。

事例 1

園としての哲学を共有し 保育者間の対話を促して 園全体で育ち合う風土をつくる

社会福祉法人仁慈保幼園 多摩川保育園（東京都大田区・私立）

多摩川保育園は、子どもの興味を出発点とした保育を大切にしています。園行事も、日々の遊びや活動の延長と位置づけており、年度によって内容は大きく異なります。こうした保育を支えているのが、園の理念を共有し、ドキュメンテーションの作成や同僚との語り合いなどを通して育つ、一人ひとりの保育者の存在です。

日常のひとつの通過点としての行事

自由に環境と関わり 興味や発想を広げていく

「自分の足で歩いて人生を切り開ける大人に育ってほしい。そのためには、幼児期に自分の興味をとことん追求して遊び込む体験を積み重ね、非認知能力と呼ばれる意欲、自尊心、粘り強さ、仲間と協力する力、感性を伸ばすことが不可欠と考えています」

多摩川保育園の妹尾正教園長はこのように話します。

園では、それぞれ興味の異なる子どもたちが好きな遊びを見つけ、「やってみたい」と思ったことができるだけやれるように多様な環境を

用意しています。園庭には梅、桜、柿、姫りんごなど四季を感じられる木々のほか、大きな築山やビオトープのある池があり、子どもたちは泥だらけになってのびのびと遊んでいます。3歳以上は異年齢混合クラスとしており、コーナーに区切られた保育室では、積み木やままごとなど幾つかの遊びの中から、やりたい遊びを選んだり、多様な素材と向き合いながら表現する姿が見られます。またコーナー遊び以外にも日常の中から生まれた興味を伴う活動が同時に展開しています。

こうした理念がよく表れている行事が、毎年9月に実施する「コッコロ・フィラーレ」です。イタリア



多摩川保育園
園長
妹尾 正教先生



多摩川保育園
3歳以上児主任
佐伯 絵美先生

語の「コッコロ（かわいい子ども）」と「フィラーレ（つむぐ）」を組み合わせた造語で、保育者と保護者が一緒に子どもの成長をつむぐことを目指しています。

コッコロ・フィラーレは、その時期に子どもたちが強い興味を抱いていることを基に、保育者が企画し、保護者とともに「こんな見方もあるよ」といった新しい視点をもたらす場です。そんな働きかけによって、ますます興味を深めた子どもたちが自分自身で発想を広げ、遊びや活動がより豊かになるきっかけづくりをしています。

「もともと持っている興味に『推





写真1・2・3● 昨年のココロ・フィラーレでは、宇宙などをテーマとしたさまざまな体験や展示を用意しました。子どもたちは、ふだんの遊びや活動という土台があるため、どのコーナーにも集中しており、ますます興味を深めていた様子でした。子どもへの説明などは保護者が行いました。



進力』を与えるのが狙いです。そのために4月から、または前年度からの興味の変化を辿り、内容を吟味します」(妹尾先生)

子どもの興味が出発点となるため、活動内容は年度によって大きく異なります。2015年度は、宇宙に関心のある子どもたちもいたので宇宙をテーマのひとつとしました(写真1・2・3参照)。例えば、保育室に宇宙船の飾りつけをして宇宙の映像を流したり、別の部屋を真っ暗な状態にしてブラックライトで照らして宇宙空間に見立てたり、大がかりなセットを子どもたちと一緒に制作しました。

また、陸上のウサイン・ボルト選手が話題になった時期に、近くの土手で、子どもたちがメジャーを使って100メートルを測り、何秒で走れるかを比べる活動をしました。これがきっかけとなり、「測って比べること」への興味が高まったため、ココロ・フィラーレでは、ボルト選手の等身大の写真や足形、走っている

時の一歩の距離を展示したり、アフリカゾウの等身大の絵を飾ったりして、子どもが比べることを楽しめる環境を用意しました。

ココロ・フィラーレの企画は子どもの興味・関心を把握している保育者が担当し、保護者には各コーナーでの説明や機器の操作などの協力をお願いしています。保護者に対しては、園の保育観や子ども観を具体的に伝え、子どもの育ちをより深く理解してもらう機会にもなっています。

この活動のポイントは、テーマ設定において日々の保育とのつながりが強く意識されている点です。もともと子どもの興味を基に内容を決めていますから、子どもたちは事前の準備段階から非常に積極的に参加します。当日は、保育者が少人数のグループを引率して順番にコーナーを回り、集中しやすいように配慮しています。ふだん、自分たちが興味をもって遊びや活動のテーマにしていることに囲まれて、子どもたちは釘

づけになります。

行事は決してゴールではなく、あくまで通過点としています。そのため翌日以降もココロ・フィラーレで使ったモノはできる限りその後の保育に取り入れるようにしています。

「『楽しかったね』では終わらず、その後も環境と関わり、興味や発想を飛躍させてほしいと考えています」(妹尾先生)

個々の子どもと話し合っ て生活発表会の内容を検討

園の理念は生活発表会にも表れています。生活発表会(3歳以上児のみ)でも、子どもの興味を出発点とするのが大事という考えは変わりません。みんなで練習した活動を一齐に発表するのではなく、子どもが意欲的にチャレンジしてできるようになったこと、また子ども自身が1年間を通して学んだことの中から保護者に見せたり伝えたいと強く思っていることなどを発表する方針

としています。そのため、一人ひとりが担任の保育者と話し合い、発表内容を決めていきます。5、6名のグループで発表するケースが多いですが、中にはひとりで発表する子

もいます。「日頃の興味や活動とつながる発表だからこそ、子どもたちはいきいきと取り組みます。そんな姿を通して一人ひとりの成長を伝えていま

す」(妹尾先生)

子どもの興味を捉える視点を、保育者は「対話」を通してみかく

ドキュメンテーション作成を通し 子どもの内面を注意深く見取る

子ども一人ひとりと向き合い、観察することで子どもが今何を考え、どこに向かおうとしているのかが見えてきます。目の前の子を知ろうと幾つかの視点をもって観察することで必ずと一人ひとりに合ったサポートや環境構成が見えてくるのです。目の前の子どもの「瞬間」に意識を向ける時に、役立っているのが、日々保護者に子どもの姿を伝えるために作成する「ドキュメンテーション」です(写真4参照)。

ドキュメンテーションは、写真と文章で子どもの姿や内面を説明するもので、毎日掲示して子どもの様子を伝えています。3歳以上児クラス主任の佐伯絵美先生はこのように話します。

「例えば、万華鏡を覗いている子

どもがいるとします。一見、見過ごしてしまいそうな何気ない場面ですが、目の前の子どもが万華鏡の何に魅力を感じているのか、どこを不思議がっているのか、またはどこで悩んでいるのか、様々な角度から見ることでその子どもの「今」が見えてきます。ドキュメンテーションではそうした子ども自身の気づきや考え、試行錯誤や葛藤をそのまま伝えるようにしています。そうすることで、子ども自身が持つ力を保護者に知って貰うと同時に、保護者の子ども理解にもつながります」

ドキュメンテーションは、保育者同士が日々の実践について語り合うきっかけにもなっています。事務室で作成する際、「今日はこんなことがあった」「ここが面白いかなかった。〇〇さんならどうする?」といった会話が自然と生まれて、子

どもの姿が共有されていきます。

さらに掲示前には園長や副園長、主任などが目を通します。その際、保育者との間で保育に関わる対話が生まれて、話し込んだり、アドバイスをしたりするのが日常的な光景です。

「保育者の成長は対話によって最も効果的に促されると思います。そのため、一方的に教えるのではなく、対話を通して考えてもらうことを大切にしています。例えば、『こんな場面ではどうしたらいいのだろうか』と迷いがある場合、『こうなさい』と伝えるのではなく、園としての方向性を示し、それを柱としながら保育者自身が考えられるようにしています。また、1日5分でも良いので、日々対話を積み重ねることが、とても大切なのです」(妹尾先生)

経験が浅く、ドキュメンテーションの作成に手こずる保育者には、「どうして、その環境を用意したのか。どうしてその言葉をかけたのか」などと問いかけ、自身の環境設定や援助の意味を振り返るように促します。また、保護者にどのような育ちを伝えたいかという視点を忘れないこともポイントだと言います。

興味を蜘蛛の巣状に表した「Web」を作成

日々の対話を通して実践を分かち



写真4 ● 保護者に向けて掲示したドキュメンテーション。
保育者は必ずデジタルカメラをもって保育に臨み、午睡の時間などに作成します。特に遊びや活動のプロセスに着目し、子どもの内面を伝えています。

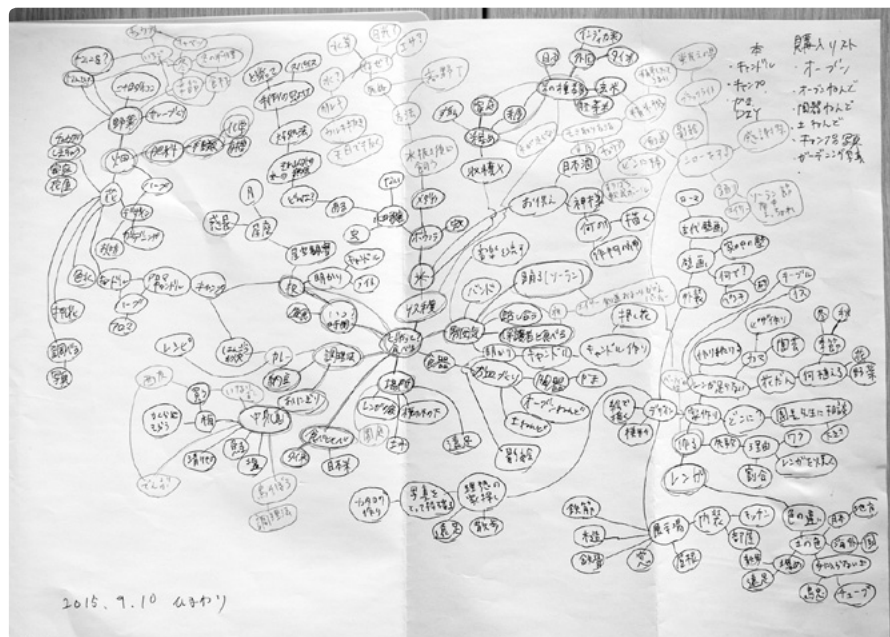


写真5 ● 3歳以上児クラスの担任が作成したWeb。毎月1枚を作り、子どもの興味の変化を追います。一見、まったく異なる内容が、実は子どもの中ではつながっていると気づくことが多いと言います。

合いつつ、さらに深いレベルでの意識の共有を図るため、クラスごと、またクラス合同のミーティングをそれぞれ月1～2回ほどの頻度で実施しています。

クラスごとのミーティングでは、担任が子どもの姿について語り合いながら、子どもの興味の広がりや蜘蛛の巣状に表す「Web」を作成します（写真5参照）。

Webの中心には、その時点で子どもが興味をもっている内容（トピック）を記入し、そこからつながりがある内容を線で結んでいきます。さらに今後、興味がどう広がるかを予測して記入しながら、事前に用意したい環境（素材など）や道具、保育者の言葉かけなどを検討します。

そして、実際の生活や遊びを通して子どもの興味が広がったり変化したりする度に、Webに赤色で記入していきます。Webの予測と実際は重ならないことが多いのですが、それで問題はないと言います。

「予測とぴったり重なった場合は

喜ぶより、むしろ『働きかけが強過ぎたのでは』『計画をこなす保育になっていないか』といった視点から振り返る必要があると考えています」（妹尾先生）

予測と違ったとしても、事前に十分に検討しているため、子どもの興味の变化が追いやさく、「なるほど、そっちに向かったのか」などと、子どもの発想のおもしろさを感じ取れると言います。

保育者にとっては、他の保育者と一緒にWebを作成することは互いの成長の機会にもなっています。

「普段から子どもの姿を捉えていないとなかなか予測できません。保育者の思いから出発してしまうと、どうしても働きかけが強くなり、保育者だけが必死になってしまい、子どもは楽しんでいないという状況

に陥りがちです。その点で、保育者どうして対話を持ちながら興味の広がりを考えることは、子ども一人ひとりのことを知る手がかりを掴むだけでなく、保育者自身の成長につながっているとと言えます」（佐伯先生）

3歳以上児クラス合同のミーティングでは、クラスの活動内容や子どもの姿について自由に語り合います。「この本が参考になるよ」「こんな展開になることも予想されるよ」など、お互いの活動をより良くするための意見を交わし合うことが多いと言います。

子どもの興味に沿った活動を展開していると、ときには育てたい子どもの姿と活動内容がずれることがあります。その場合、子どもの興味を尊重しつつ、活動内容を修正する必要があります。合同ミーティングは、園の理念に沿って、クラスの方向性を確認し合う意味もあります。



社会福祉法人仁慈保幼園 多摩川保育園

◎ 2013年4月に大田区立から民営化された。一人ひとりの興味から生まれる遊びを大切に、感性や意欲、人と関わる力などを育てる保育を実践している。

園長 妹尾正教先生

所在地 東京都大田区多摩川2丁目24-63

園児数 118人(0～5歳)

事例2

園内に育んだ「信頼感」をベースに 保育者が子どもと一緒に 伸びていく環境づくり

認定こども園 せんりひじり幼稚園（大阪府・私立）

遊び中心の保育を通じ、子どもを肯定的に捉えて育ちを支えているせんりひじり幼稚園。子どもが意欲的に遊びや活動に参加できるように、まず一人ひとりの保育者が主体的に考え行動できる環境づくりを大切にしています。どのようなサポートを通して、保育者の成長を促し、主体的な姿勢を引き出しているのでしょうか。

子どもが安心して過ごせる環境が、非認知能力の育ちを支える

子どもの意欲や主体性は「信頼感」から生まれる

園内に育まれた「信頼感」がベースとなって子どもは伸びるという思いが、せんりひじり幼稚園の実践の根底にあります。信頼感は、子どもどうし、保育者と子ども、また保育者と保護者など、園に関わるあらゆる人のつながりを強めることで構築しています。

信頼感の大切さを改めて確認したきっかけは、2015年の夏に（公財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の幼児教育実践学会での発表で、5歳児のお店屋さんごっこによる協同的な学びがどのような力につながるかを整理・分析したことでした。研究で特に重視したのは、非認知能力の育ちを見ることです。

お店屋さんごっこは、主体的に考え、調べ、試行錯誤し、協力し、つくり上げ、運営するといったさまざまな場面で構成されます（写真1参照）。こうした学びを体験することが、主体性や協働性、思いやり、創意工夫、向上心、協調性といった非

認知能力の高まりにつながると考えられました。さらに、看板やメニュー表の作成やお店運営のための人数配分などを通し、非認知能力と一緒に、文字や数といった認知能力を身につけていく姿も見られました。

こうした実践を通し、子どもがのびのびと育つためには、冒頭で述べたような信頼感が欠かせないことに、研究に参加した保育者は気づいたと言います。副園長の安達かえで先生はこのように説明します。

「お店屋さんごっこでは、一人ひとりの子どもが意欲的に関わり、遊びが広がる中で、非認知能力に結びつく姿が見られました。こうした意

認定こども園
せんりひじり幼稚園
園長
安達 譲先生



認定こども園
せんりひじり幼稚園
副園長
安達 かえで先生

欲や主体性のもとになるのは、『これをやりたい!』という意欲をもったときに、『きっと先生や友だちは受け入れてくれるだろう』『みんな

写真1●実践研究のお店屋さんごっこの様子。自分のやりたいお店を発表し、話し合いで決めたあと、何をつくるか、どう運営するか、どうすればもっと良くなるかなどを子ども主体で考えました。



が協力して応援してくれるに違いない』という安心感です。そういう気持ちをもつためには、園内に信頼感を醸成することが不可欠だと感じたのです」

子どもを信頼して 見守ることで伸びていく

信頼感をベースとして、互いに認め合い、支え合いながら伸びていく。そんな保育の実現を目指して、保育者が子どもを信頼して見守ることを強く意識しています。

「保育者が子どもの気持ちに寄り添い、支えることが第一です。『やっごらん』とそっと背中を押したり、失敗しそうでも見守ったりすることを大切にしています」（安達かえで先生）

子どもの気持ちを尊重し、「自分は自分であっていい」という感覚を生み育てることで、意欲や主体性を育てているのです。

もっとも、子どもの気持ちに沿うだけで、「放っておく」保育になってしまうと子どもは伸びにくいと考えています。

「何もない状態から、遊びはなかなか生まれません。そこで、『これを使って何かをしたい』『これとこれを組み合わせたらおもしろそう』といった発想につながりやすい環境を用意することを大事にしています」（安達かえで先生）

例えば、子どもがダンゴムシに興味をもつ姿が見られたら、図鑑や飼育ケースをさりげなく置いておいたり、プランターの下を探すように促したりします。観察時には、雌雄の違いやエサを食べるときの足の動き

写真2・3●四季折々の植物や昆虫などとの出会いがある園庭。いたるところに咲く花を使って自由に色水遊びができるように道具を用意しておくなど、環境との関わりから遊びが生まれるように配慮しています。



など、細かいところに興味をもてるような援助を心がけます。（写真2・3参照）

保護者との信頼関係が 子どもの育ちを支える

子どもがのびのびと過ごせる環境づくりには、一人ひとりの保育者を信頼して任せることが欠かせないと園長の安達譲先生は述べます。

「保育者が主体的に保育を行うからこそ、『この展開ならもっと楽しんでくれそう』といった発想が次々に生まれ、子どもも主体的になります。園長や主任が指示を出し過ぎると、保育者が自由に動けず、子どもとの関係にも影響するので、できるだけ主体的に動けるようなサポートを心がけています」

そのために、ふだんからおおらかな姿勢で保育を見守り、悩み事をオープンにできる雰囲気づくりを大切にしています。フラットな関係づくりの一例として、保育者の採用では、現場の保育者も面接に参加し、園長先生以下、全員が1票ずつ投票をして決定しています。

保育者と保護者の信頼関係を育む

ことも、保育の質を高めるポイントです。

「園として一生懸命に取り組んでいることが、保護者から理解されると、保育者はより主体的になっていくのです」（安達譲先生）

子どもは保育者と保護者の関係をよく見えています。両者の良好な関係を見せることは、「友だちと仲良くしよう」と言葉で伝えるよりも大切だと考えています。

園では、毎月、子ども一人ひとりの姿を写真とテキストで伝える「ポートフォリオ」を作成して、保護者と子どもの成長を共有しています。また、それぞれ月1回ほど発行する「園長通信」「副園長通信」でも、子ども理解を深めるための解説に力を入れています。

「保護者には『すてきだった』『夢中だった』といった言葉だけではなく「（非認知能力の）〇〇の育ちにつながっている」などと説明することも大切であると感じています。通信では、保育の実践や子どもの育ちについて、非認知能力をかみ砕いた説明も交えて伝えることもあります」（安達かえで先生）

子どもとの関わりを通して、保育者が伸びる環境づくり

先輩保育者の知見をまとめて 新任教育課程を作成

信頼関係を基盤とした温かみのある雰囲気づくりのひとつの工夫として、新任保育者の育成にも力を入れています。

園では1年目はベテラン保育者と組んで学び、3年目からはひとりで担任をするのが目安となっていま

す。以前は具体的な育成方法は新任と組む個々の保育者に任せており、それぞれの工夫や配慮によって新任保育者の成長を支えてきました。

そうした育成ノウハウを「共有財産」にしようという狙いでワークショップを実施し、新任保育者が時期によって抱きやすい悩みや不安を整理して、具体的な配慮や心もちをまとめて「新任教育課程」を作成し

ました（図1参照）。

新任保育者の育成は、「新任教育課程」をもとに行います。

例えば、入ったばかりの4月は、「何がわからないかもわからない」「保護者と話すのが怖い」「子どもの前に立つと緊張して止まる」「保護者への伝え方、話し方がわからない」といった悩みや不安が想定されます。それに対して育成する側の配

図1 「せんりひじり幼稚園新任教育課程」

	4月	5月	6月	7月
	何もかもが不安	毎日追われて必死		
実態	<ul style="list-style-type: none"> 何がわからないかもわからない 副担任とうまくやっていけるか不安 保護者と話すのが怖い 子どもの前に立つと緊張して止まる 子どもへの関わり方がわからない 子どもと1対1でつきっきりになる まわりが見えない 個人懇談でほとんどしゃべれない 子どもへの言葉かけがわからない ピアノの練習をしても子どもの前だと弾けなくなる ◎子どもが可愛くて救われる ◎副担任がいるのが心強い 	<ul style="list-style-type: none"> 給食が食べられない（給食の援助、どこまでしたらいいかわからずにつきっきり） 先輩みたいにできるかどうかというプレッシャー 泣いている子への対応がわからない ケンカやトラブルの仲裁の仕方がわからない 子どもの行動（ケンカや危険）に気づけない 	<ul style="list-style-type: none"> 行事になると頭が真っ白 笑顔が減っていく 声が出ない、通らない 自分のやっていることが合っているかわからない 子どもの前で妙な間が空く 自分にできることを探すがあたふた… 	<ul style="list-style-type: none"> 日々のコーナーづくりに悩む 私の話を聞いてくれない… 子どもになめられているんじゃないか…
保護者	<ul style="list-style-type: none"> 保護者と話すのが怖い 保護者への伝え方、話し方がわからない（子どもの様子、ケガの対応） 保護者の悩みにどう声をかけたらいいかわからない <p>※先輩が保護者に伝えたことを保育後に伝え、伝え方がわかるようにする ※保護者の悩みを聞くだけでOK！報告を忘れない→最後まで丁寧に対応する。任せっきりにしない</p>			
悩み	<ul style="list-style-type: none"> 引きつける技術がない 気になる子への関わり 余裕がない 	<ul style="list-style-type: none"> 写真を撮れない 優先順位がわからない 時間配分ができない 	<ul style="list-style-type: none"> まわりの状況が見えない 	<ul style="list-style-type: none"> 全体と個のバランス こちらが発信するところと待つところの判断 特別支援の個への関わりが難しい
配慮・心もち	<ul style="list-style-type: none"> 毎日来てくれるだけでOK ほめられるところを見つける 挨拶のみでもOK！できるだけできなくても責めない はじめの1週間で全員の保護者に電話連絡 ベアの先生との早めの関係づくり 学年の話しやすい雰囲気 担任の名前を覚えてもらえるようによく呼ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 笑顔で子どもの前に立てるだけでOK 子どもと信頼関係を早く築けるようにフォローする 同世代の先輩にフォローをお願いする 近い先輩がモデルになる 保護者と信頼関係が築けるように細かいチェックをする 		<ul style="list-style-type: none"> 子どもの前で話しやすい雰囲気をつくってからバトンタッチ 少しでも楽しさを感じられるようにほめる その日の振り返りとアドバイスを大切に
環境構成	<ul style="list-style-type: none"> ☆先輩についていく！ 間違っても当たり前！ 先輩のまねをすることから、とりあえずやってみる！ 			

慮や心もちとして、「毎日来てくれるだけでOK」「先輩が保護者に伝えたことを保育後に伝え、伝え方がわかるようにする」「ペアの先生との早めの関係づくり」などが例示されています。

何もかもが不安な状態から出発し、次第に慣れてくると課題は具体的になっていきます。例えば、7月は「私の話を聞いてくれない…」「全体と個のバランス」「こちらが発信するところと待つところの判断」といった姿が見られるようになります。それに対して、「子どもの前で話しやすい雰囲気をつくってからバトンタッチ」「その日の振り返りとアドバイスを大切に」といったサポートを想定しています。

もちろん、一人ひとり悩みや課題が異なる場合もありますが、特に大事な視点を共有することで、これまで以上に園全体で保育者を育てる雰囲気が強まりました。

「以前、あるベテラン保育者が、子どもの前で新任保育者の名前を多く呼ぶように心がけているのを知りました。子どもから早く覚えてもらえるほか、子どもが家庭での会話で話題に出すため保護者からも信頼されやすくなるのが狙いです。とてもすばらしい気づかひに深く感心しました。こうした方法や視点を全体で共有することは、育てる側・育てられる側の双方にメリットが大きいと感じます」(安達謙先生)

「保育に正解はない」ということを 出発点に、意見を交わし合う

日々の実践を通して保育者の成長を促すことも重視しています。

保育者の自主性を重視している園には、若手からベテランまで意見が言いやすい風土があります。職員室では子どもの姿について語り合う光景が日常的に見られ、そうした習慣が保育者の成長を支えています。

「子どもの姿についてみんなで語り合うのを楽しんでいます。そうした会話を通して、保育への思いやアイデアの共有、また子どもの育ちの再確認が自然と進められています」(安達かえで先生)

月1回、2時間ほどのミーティングも意識を共有する場となっています。毎月のカリキュラムの検討と一緒に、ポートフォリオなどをもとに「来月はこういう育ちが見られそうだ」「こんな援助に力を入れよう」などと子どもの姿や具体的な援助について話し合います。

「非認知能力を伸ばすためには、子どもが『こんな遊びをしたい』と思ったとき、それにふさわしい環境が用意されていることが大事です。そのため、ミーティングを通じて、遊びや教材の研究や準備も進めています」(安達謙先生)

ミーティングの際に保育者が大事にしているのは、「保育に唯一の正解はない」という考え方です。誰かが正解を教えるのではなく、一人ひとりが意見やアイデアを出し合い、明日、子どもとの関係の中で正解を見つけていこうというスタンスで話し合いを進めています。

しかし、3号(満3歳未満の保育を必要とする子ども)の担当者はミーティングや打ち合わせの時間を捻出するのが難しいという課題もあります。そこで、午睡の時間はシルバー人材制度から派遣されたスタッフの手を借りたり、週1回は連絡帳を書かない日を設けたりするなどの工夫をしています。

外部の視点を取り入れ 継続的に保育改善に努める

保育者育成においては、外部の視点を取り入れることも重視しています。例えば、定期的に大学教員の指導を受けたり、公開保育を積極的に実施したりしています。

「園内だけで保育の改善に努めていると、どうしても行き詰まることがあります。外部の方に園の実践を客観的に見てもらい、指導や助言を受けることも大事だと考えています」(安達かえで先生)

園では、外部の方の指導や助言を受ける中で、徐々に一人ひとりが伸びる遊び中心の保育を充実させてきた歴史があります。今後も、よりいっそう、オープンな体制をつくり、保育の質を高めていく考えです。

子ども、保育者、保護者が信頼し合う関係性をつくり、子どもの言動を肯定的に捉えて成長を支えていく——。そんな実践を通して保育者が自信を深め、子どもと一緒に育っていく姿がとても印象的な園です。

認定こども園 せんりひじり幼稚園

◎ 1923(大正12)年創立のひじり幼稚園の姉妹園として、1966(昭和41)年に開園。子どもの興味を引き出す多様な環境づくりに力を注ぎ、一人ひとりの成長を支えている。

園長 安達謙先生

所在地 大阪府豊中市新千里北町3-2-1

園児数 443人(3~5歳)